

# Tea Times

お茶の水女子大学広報誌 ● Tea Times ● January 2005

12

## CONTENTS VOL.12

**2005年の新春を迎えて** ..... ②

**新お茶の水女子大学名誉博士誕生** ..... ③

**機構紹介④ 一総務機構一** ..... ④～⑤

●「クリエイティブ・ライティング」を開設しました ..... ⑤

●遺伝力ウンセリングコース ..... ⑥

●「互学互教」と「社学連携」による  
「知の市場」を求めて ..... ⑥

道を切り開いた先達たち③

**日本初の女性化学者 黒田 チカ** ..... ⑦

**お茶の水女子大学 貴重資料紹介** ..... ⑧

**植物と染め** ..... ⑨

**歴史的資産としてのキャンパスの樹木** ..... ⑩～⑪

●お茶大☆キラリ 第55回徽音祭を終えて ..... ⑫

●大学の暦 ..... ⑫

**編集後記** ..... ⑫

# 2005年の 新春を迎えて



お茶の水女子大学長  
本田 和子

あけましておめでとう !!  
新春に当たって、何よりも先ず、学生、教職員、そして本学を見守っていただいている学外の皆様のご健康を祈りたい。

2005年4月、お茶の水女子大学は、新学長を迎えて法人化2年目の歩みを開始する。有史以来と言われた大学制度の激変を、全学の心と足並みの一致によって何とか乗り切ることが出来たことを感謝し、新しい歩みがより健やかにより充実したものであるようにと願っている。

既に言及したことであるが、法人化に当たって、本学は、「学ぶ意欲のあるすべての女性のために、真摯な夢の実現される場でありたい」というミッションを掲げた。このことは、優れた女性人材の育成という全世界的な使命に応えることでもあり、また、わが国最古の女子高等教育機関としての本学の歴史を継承する道もあるからである。

地球は、いま、グローバリゼーションの波に晒され、民族も国家も異にする、そのゆえに政治形態も宗教や伝統も異なる多くの人々を、かつての

ように相互に無関係・無縁に存在することを困難にしている。私たちは、異なった文化・伝統、さらにはものの見方や価値観を異にする人たちと身近に出会うことを余儀なくされ、そのゆえの差異に戸惑いつつ新しいありかたを模索している。こうした現状を見据えるとき、お互いに異質な他者を理解し共存するための寛容さと、新しい世界観を構築することの不可避性に気付かざるを得ない。

新しい世界観の中心には、「多様性の尊重」という価値が位置づけられるだろう。異質の他者との共存を志向するならば、先ず尊重されるべきは、その「多様性」だからである。先進国が人口減少期にさしかかり、かつ、地球の選び取る新しい価値が「多様性」であるとすれば、今世紀は、女性の登場を求める世紀であると言えそうである。仮に、これまでの歴史が、伝統的ジェンダー観のゆえに女性の登用に消極的であり、その資質能力を十分に開花させ得ていなかったとすれば、いま、私たちは、そのことに挑み、すべての女性たちに相応しい生き方を提供することに努めねばならない。大学の使命が「知の創造と継承とその活用」にあるとすれば、本学も、長年にわたって蓄積してきた知的・教育的遺産の更なる充実を図りつつ、それを「女性の育成のために」活用することこそ、今世紀の要請に応え得る最良の道と考える。

「多様性の尊重」が、一方の性にのみ権限を付託してきた従来の偏向を改め、ジェンダー公正への道を切り開くとするなら、そして、そのことによって、女性の生きやすい世界が構築されるとして、「多様性の尊重」は、学問や教育の在り方にも適用されねばならない。そして、このことが、新しい学術文化の創造に道を開くのではないか。女性人材の育成と本学の目標が、単に「女性のため」にのみ機能するのではなく、新しい学術文化の創成に寄与し、また、新しい世界秩序の構築に貢献し得ると考えるなら、本学の未来は明るく、眩しいまでの輝きに覆われて見えよう。

新学長もまた、本学の生み出した優れた人材の一人であり、私どもがいま掲げるこの目的・目標を共有し、その実現に向けて強い信念と豊かな抱負を披瀝してくれている。いまこうして、よきリーダーを与えられた幸運に感謝し、新学長とともに、本学がより力強く歩み続けることを期待し祈念して、年頭のご挨拶としたい。

# 新お茶の水女子大学名誉博士誕生

本学では、このたびフーリヤ・カラビアス・リジョ博士と深井晃子教授へお茶の水女子大学名誉博士称号を授与いたしました。カラビアス博士は4人目、深井教授は5人目の本学名誉博士となります。各名誉博士のご紹介をいたします。

## フーリヤ・カラビアス・リジョ博士

室 伏 きみ子 (理事・副学長)

フーリヤ・カラビアス・リジョ博士（メキシコ国立自治大学教授）は、地球環境の保全と貧困の克服という学術的・社会的な活動を高く評価され、第12回花の万博記念「コスモス国際賞」を受賞なさいました。研究者として、また政治家としての博士の活動は、開発途上国を中心とした世界中の国々から尊敬を集めています。特に若者たちは、博士のスケールの大きな生き方に啓発され、そこから多くを学び、自らの生き方を考える大きなよすがとすることでしょう。本学の学生や生徒たちにとっても、博士は素晴らしい役割モデルとなって下さることと信じます。博士の来日を機に、10月25日に、本学から名誉博士称号を授与し、本学講堂において「コスモス国際賞」受賞を記念してのご講

演をいただきました。附属の生徒たちや一般の方々も大勢参加して下さり、参加者は800名を数えました。聴衆はそれぞれに、感激と新たな希望をいただいて、帰途についたことでしょう。



## 深井晃子教授

深井晃子氏は、本学の旧家政学部被服学科を卒業および大学院を修了後、昭和54年から京都服飾文化研究財団のキュレーターとして服飾遺品の収集と展覧会企画に当たり、ファッション文化の啓蒙活動を行ってこられました。京都国立近代美術館における「浪漫衣裳展」「華麗な革命」展から近年の「身体の夢」「ファッションと色彩」展まで、創造性あふれる企画展を手掛け、特に平成6年の「モードのジャポニスム」展はその後パリ、ロサンゼルス、ニューヨークの美術館を巡回し、国際的に高い評価を得ました。海外の美術館との共同監修による展覧会は、日本のファッション文化とその研究や行政を海外に知らしめたばかりか、国際的にも服飾文化の向上に貢献しました。内外の各種

徳 井 淑 子 (生活科学部教授)

メディアにおける評論活動はもとより、学界においても美術・デザイン・比較文化論に新しい領域を拓くものとして注目され、現在は静岡文化芸術大学大学院教授としても活躍されています。



### お知らせ

深井晃子氏の名誉博士称号授与記念講演会を、平成17年2月1日(火) 15:30~17:00にお茶の水女子大学共通講義棟1号館301教室にて開催いたします。一般の方の参加も歓迎します。

## — 総務機構 —

前号に引き続き、本学の運営を担う機構を紹介いたします。最終回となる今回は、総務室、財務室、総合評価室から構成される総務機構です。それぞれの室長に紹介していただきます。

### 総務室

#### 「総務室とは何をするところ？」

総務室長 淳添 慶文  
(文教育学部教授)

**総**務室は何をするところか、諸説あります。実際にしていることを述べますと、まず労働条件を含めた、人事に関わる問題があります。教育公務員特例法の下にあった教員は、独立行政法人化とともに労働基準法の適用を受け、勤務時間などについて厳しい義務を課せられることになったのですが、研究や教育の遂行上多大の困難が生じるのは困ります。労働の仕方や勤務時間の配分について労働者本人の裁量に委ねるという裁量労働制の採用が適切であろうと考えられ、教員の了解を得て、10月1日から実施しました。このほか、教員のサバティカル制度を、内容的には必ずしも満足して頂けるものではないものの来年から実施できるようにしましたし、現在は教員の出産、育児のサポートについて検討しています。頭が痛いのは、大学に与えられる運営費交付金が毎年一定額減らされることによる人件費の削減の可能性です。大学の最大の資産は教育研究を遂行する教員の質と量にあるという基本認識のもとで様々な問題に対処することが大切だ、と総務室では考えています。

このほかに研究室など各施設の整備と配分も守備範囲で、現在資料を整理しつつある段階です。情報公開の範囲を決めるのも仕事のひとつ。故に総務室には総務、施設、企画広報の3課長が室員として加わっています。教員の問題だけを扱う訳ではありませんし、どうやら、他の室が担当しないことをやるところが総務室だ、という解釈が一番現状に近いようです。

### 財務室

#### 「お茶大の財務は大丈夫？と心配し、 関心を寄せてくださる皆さんへ」

財務室長 御船 美智子  
(生活科学部教授)

**皆**さんは、国立大学法人お茶の水女子大学の財産はどのくらいあるかご存知ですか。土地、建物、研究機器など合わせて約804億3千万円です。平成16年度の財政規模、予算は66億4700万円、そのうち、授業料・入学料・検定料は19億3千万円で29%にすぎません。「運営費交付金」(国庫からの収入)が46億6千万円、70%を占めています。国立大学法人になり、大学の使命を遂行するための目的効率性と財務の安定性が不可欠で、①大学財政に関する将来構想計画・企画立案、②予算編成、執行、決算等に関する基本方針策定、③大学財産の管理に関する基本方針の策定を行う財務室が設置されました。今後5年間「効率化係数1%」がかけられ、運営費交付金削減の中、大学財務運営はきわめて厳しいものです。授業料などは標準額の10%の範囲内で独自決定が可能となっておりますが、金額の制定については、大学全体の財政事情等を鑑みつつ、経営協議会で議論していくこととしております。「知力・知識を蓄え、自分を磨き輝こうとする女性のために開かれた大学」というお茶大の使命遂行のために、教育、学生支援、研究への資金投入をし、21世紀COEや科学研究費等の外部資金を調達して研究をさらに推進することと同時に、支出削減努力が不可欠です。まずは、できること、すべきところの節約については、トイレに節水装置をつけることから始めています。電気、ガス、水、用紙等資源の節約、知恵の提供、皆さんに是非ご協力ををお願い致します。

## 「大学評価の時代のインフラ構築」

総合評価室長 耳塚 寛明  
(文教育学部教授)

**事** 前規制から事後評価への転換は、高等教育を含む文部科学行政の趨勢のひとつです。評価結果によって、運営費交付金などの資源配分が左右される「大学評価の時代」が到来しました。しかしながら、どうやって評価し、いかに改善に結びつけるのかは必ずしも自明ではありません。国としての評価システムの整備に追われているのが現状です。

本学も例外ではありません。大学設置基準の大綱化以降、すでに学内に自己点検・自己評価の思想とノウハウが蓄積され、情報集積基盤が構築されていてもよい時期だと思うのですが、残念ながらそうではありません。総合評価室の当座の仕事は、学内に自己点検・自己評価のためのインフラを構築して、本学が生き残り、女子高等教育機関としてのミッションを果たしていくために必要な評価活動を、大学運営組織にビルト・インすることだと認識しています。

いわゆる認証評価機関による評価が7年に1度義務づけられ、また国立大学法人評価委員会による評価が中期目標期間終了時に予定されています。同委員会による評価は、各年度終了時にも実施されます。それらの基礎となるのは、誠実で堅実な日常的自己点検・評価活動です。総合評価室では、「評価指針」や「評価要綱」などを通じて評価システムを立ち上げるとともに、「教員活動状況データベース」の設計を進めています。05年春には、同データベースへの入力を開始する予定です。

「クリエイティブ・ライティング」  
を開設しました

土屋 賢二 (文教育学部教授)

お茶大には作家や編集者になることを希望する学生が多く、素質のある学生も少なくないと思いますが、作家や編集者になった人は少数です。何かのきっかけになることを願って、「クリエイティブ・ライティング」(以下CW) の授業を今年から開設しました。CW Iは作家や編集者に体験談や考え方を聞く授業で、今年は川上弘美、篠田節子、柴門ふみ、弘兼憲史などの作家と、文学賞の選考に関わる編集長、雑誌編集長などに来ていただき、毎回200名を越す人が熱心に聞きました。CW IIは、本学の文学系教員がそれぞれ作品をとりあげて、学生と感想を交わしつつ、専門家の読み方を知ってもらうゼミです。CW IIIは、ベテラン編集者が学生に文章を書かせて添削、批評するゼミです。受講者を30人に制限しましたが、初回120人の受講希望者が集まりました。CW IVは、本学の大塚常樹教授の文学作品分析です。どの授業でも学生から驚くほどの熱意が伝わってきました。



CW IIIの最初の時間に集まった学生たち



## 遺伝カウンセリングコース

室伏 きみ子（理事・副学長）

本学では、平成16年度の文部科学省・科学技術振興調整費の支援を得て、「特設・遺伝カウンセリングコース」を開設しました。このコースでは、「遺伝カウンセリング」という新しい学際領域に貢献する、先駆的な人材「遺伝カウンセラー」を養成することをめざしています。遺伝カウンセラーは、遺伝性疾患や先天異常等に関わるカウンセリングを専門とする職業で、既に欧米では広く活躍していますが、わが国ではまだ認知された職業とはなっていません。しかしヒトゲノムの解読がほぼ終了した現在、疾患と遺伝子の関係が次々と明らかにされて、遺伝医療の著しい発展は、社会における遺伝カウンセラーに対するニーズを、日毎に増大させています。

医師とクライアントの間に立ち、高い知識とカウンセリング技術を提供できる「非医師」の遺伝カウンセラーを養成し、日本の遺伝カウンセリング領域のリーダーを育てることをめざして、コース担当の教職員はたゆまぬ努力を続けています。



大学院  
新コース

## 「互学互教」と「社学連携」による

化学・生物総合管理の再教育講座

ライフワールド・ウォッチセンター長 増田 優

ライフワールド・ウォッチセンターでは、平成16年度より「化学・生物総合管理の再教育講座」を開催しております。本講座は、現代社会をよりよく理解する教養を涵養することを目指して、化学物質や生物によるリスクの評価・管理、そして技術革新及びその社会・生活との係りなどについて、自己研鑽をつむ機会を提供することを目的にしています。「互学互教」と「社学連携」を旗印に、平成16年度後期は多様な連携機関（専門機関・学会、NGO・NPO、マスメディア、企業、行政など）から100人近くの講師陣を迎えて、15科目（1科目は90分の講義15回）を開講し、社会人を中心に331人（延約5,000人）の受講者を得ました。平成17年度は、さらに消費者団体や地方自治体なども連携の輪に加え、前期28科目、後期23科目を開講予定です。そのうち45科目がお茶の水女子大学の学生に向けた単位認定の対象となります。社会人のみならず学生の参画に大いに期待します。この講座を通じ、大学と社会の連携により新しい何かが間違いなく生まれはじめ、大学が「知の市場」として展開しつつあります。



「知の市場」を求めて

社会人  
リカレント

## 道を切り開いた 先達たち



### 日本初の女性化学者 黒田チカ



(講演会で1966年)

お茶の水女子大学名誉教授  
前田 侯子

黒田チカは1884年九州佐賀で生まれ、明治初年にすでに“これからは女子にも学問が必要”と考える父の下で育てられた。幼時から勉強が好きであったチカは、佐賀女子師範を卒業後、1902年に女子高等師範学校（現お茶の水女子大学）理科に進学。“理科の実験は学校でなければできないから”というのが理科を選んだ理由。卒業の頃には化学が最も好きになった。同校から勧められ、1907年に2年の課程の研究科に入学。卒業後は直ちに女高師の助教授に就任。1913年には、中等教

員の免許証を有する者という資格で初めて女子にも門戸を開いた東北帝国大学理科学院に入学出来た。日本最初の帝国大学女子学生3人の中の1人となった。東北帝大での眞島利行教授との出会いは、その後の黒田の化学者としての生涯に決定的な影響を与えた。教授の専門分野であった有機化学に興味を持った黒田は、3年生での卒業研究を同教授の指導で、天然色素の構造について行うことを希望した。眞島教授は「紫根に含まれる色素」が結晶として取り出せることを自ら確かめて、黒田の研究テーマとした。黒田自身による紫根の色素を結晶として得ることは困難の連続であったが、その中から多くの化学研究の方法を学んだという。1916年9月に東北帝大を卒業し、日本最初の女性理学士となった。その後も黒田の研究への努力と情熱により、さまざまな反応の結果を総合的に考え、2年後には世界に先駆けて紫根の色素（シコニンと命名）の構造を明らかにし論文に発表した。東京に戻ると東京女高師の教授に就任。1921年から2年間は、文部省外国留学生として、英国オックスフォード大学のパーキン教授の下に留学。その目的に理科研究に併せて家事研究とあった時代。帰国後は東京女高師の授業の時を除いては、新設の理化学研究所の眞島研究室で、紅花の色素カーサミンの構造を明らかにし、論文に発表。この論文により1929年に東北帝大から理学博士の学位を受けた。東京女高師の先輩、保井コノに続く日本で二人目の女性理学博士、化学の分野では最初である。その後も、青花、黒豆、茄子等の色素や、ウニの棘の色素（ナフトキノン系）の研究を続けた。

1949年に新学制により生まれたお茶の水女子大学の教授に就任。定年退官後の1955年には、保井・黒田両名譽教授からの寄付金により「保井・黒田奨学基金」が理学部に創設された。これは現在に引き継がれている。

1959年には紫綬褒章を、1965年には勲三等宝冠賞を授与され、従三位に叙せられた。

## 4

お茶の水女子大学  
貴重資料紹介

『郊遊会図巻』より  
「恵比寿麦酒工場見学」

(明治27年6月19日制作、画:荒木寛畠、詞書き:小中村義象)



大学資料委員会委員 秋山 光文（文教育学部教授）

明治27(1894)年5月6日、東京女子師範学校の教師・学生たちは揃って目黒祐天寺まで日帰りの遠足を行った。本作品は、その模様を絵巻仕立てにしたもので、題簽欠落のため長い間の「遠足の日」と称され、記録台帳にも仮題のまま登録されていた。しかし、本委員会のメンバーでもある小風秀雅教授（日本近代史）の調査により、本学では遠足を「郊遊会」と称していたことが明らかになり、標記の題名に改められた。

冒頭には詞書きと共に、お茶の水の校舎正門から出発する摂理（校長）を先頭に、教師や学生たちの姿が描かれている。一行はその後、芝高輪から品川を経て目的地の祐天寺にいたり、目黒不動尊の旧蹟を見学した後に昼食をとる。帰路は恵比寿のビール工場見学後、愛宕山を経由してお茶の水の校舎に帰るという大層盛り沢山な内容で、こうした日程が格式高い詞書きによって綴られるとともに、伸びやかな筆致に淡彩を施した挿画が添えられて見るものの興を引く。

本図は、帰路に立ち寄った恵比寿のビール工場付近を描いた場面。目黒方面から恵比寿を目指す一行の行く手には、煉瓦造りの工場が聳えている。詞書きには、「目黒の停車場よりやや遠からざるところに煉瓦造りのいかめしきは名に高き恵比寿麦酒製造会社なり（中略）大なる機械ともにあるは水をこし火をふきつ

つきしめきあへるさまいと珍し（後略）」と記されている。文中の「恵比寿麦酒工場」というのは明治22年に建造された日本麦酒会社目黒工場を指し、煉瓦造り三階建ての工場では、ドイツ製の装置で「ゑびすビール」と名付けられた本格的なドイツ風ビールを作っていた。因みに、ビールの出荷駅として製品名から名をとった恵比寿駅が開業するのは明治34年のことで、本作品の制作時にはまだ存在していない。

挿画を担当した荒木寛畠は天保2（1831）年江戸に生まれ、8歳の時に谷文晁系の画家であった荒木寛快に入門し、やがて養子となった。養父と並んで花鳥画を得意としていたが、明治5（1872）湯島聖堂で開催された博覧会出品の油彩画に刺戟され、洋画に転向して川上冬崖に学んだ。本学には明治26年より教授として着任し、翌年に本作品を手掛けたことになる。

詞書きを記した小中村義象は、明治中期～大正期に活躍した国文学者・歌人。号は藤園・知旦。元治元年（1864）年肥後國（熊本県）生れ。国学者の小中村清矩の養子であったが、のちに本姓の池邊に復した。明治19（1886）年東京帝国大学古典講習科卒業。国文・和歌・古代法制に精通し、本学では明治31年まで国語を担当していた。

# — 植物と染め —



駒城 素子（生活科学部教授）

お茶大構内には華やかな桜の木は少ないのですが、銀杏をはじめとして楓、梅、椿、山茶花、車輪梅、枇杷などの木々が、ヨモギなどの雑草とともに、都心の中でしばし自然を味わえる空間を作っています。

桜の優雅な色はもちろん、バラやチューリップなど色とりどりに咲く美しい花を見ると、あるいは晩秋の鮮やかなもみじをみると、この色を衣服に移して身に着けることができたらさぞ心楽しいことであろう、と思うのは筆者だけではないと思います。しかし、花びらなどからそのままの色に染められるものはありません。古代から染料として使われてきた植物のほとんどは、通常では想像できないような、思わず色を染め出すということの方が多いのです。しかも花びらよりむしろ葉や枝、幹に色素が含まれていて昔の人は上手に利用してきました。ただ植物色素の多くは直接に繊維に染着する力は弱く、媒染という技法をとります。これが合成染料の使いやすさに慣れた者にとっては少々厄介で、場合によってはむら染めになりやすいなど染色法が難しい染料（茜や紫根）もあります。しかし媒染剤によってしっかりと染めた色は、洗濯しても色が落ちず丈夫な染色物になります。いわば自然を身につけることができます。

染料植物は医薬としても効果をもつものが多く、古くから紫根、紅花、鬱金、黄檗などが利用されてきました。私の研究室では、染料としてではなく中薬（いわゆる漢方薬）として使用される枇杷の葉を使って染色してみました。枇杷葉は深緑色をしていますが、水やアルコールで抽出した色は全く違う色相をしています。どんな色だと思いますか？ 大変美しいワインレッドです。媒染剤も使わずにウールを優しい赤色に染めます。しかもこれは洗濯しても丈夫です。

この染色材料の枇杷葉はお茶大構内で調達しました。構内には数本あります。1本は生活科学部本館の正面に向かって左手の入り口にあり、初夏になるとたくさん実をつけます。学生時代、人梯子を組んで実をとったというおでんばOGもいるようです。この冬の時期はいっぱい花が咲いています。

また、保健管理センターに続いた高台、ここはかつて高い煙突のそびえた焼却炉に面して、崖になっていました。そこに大きな枇杷の木がありました。わんぱく小学生時代にこの崖を走り回った附属のOBもいることでしょう。

木はそこに過ごした人達の思いを担って時を刻んでゆきます。私達は自然に活かされています。構内の植物はできるだけ残したいものです。

# 歴史的資産としての キャンパスの樹木

本学のキャンパスには、自然を生かした数多くの樹木が植えられ、珍しいものや興味深い由来を持つものも少なくありません。本学とともに今日まで歩んできたこれらの樹木は、本学の資産ともいえるのではないかでしょうか。ここでは、数あるキャンパスの樹木のなかから、いくつか取り上げて紹介したいと思います。

## キンモクセイ

お茶の水女子大学名誉教授 清水 碩

東門から延びるイチョウ並木は、目の錯覚によって実際よりもずっと奥行きのあるように思わせ、いつ見ても見事です。そしてこの錯覚を、突当たり奥のこんもり濃い緑の葉を付けたキンモクセイが助けています。

このキンモクセイは歌人の尾上八郎（柴舟）教授と、女性理学博士第一号の保井コノ教授によって植えられたとされています。そして都内では珍しがられる大きさまでに育ちましたが、今から20年程前、春先の大雪の重さに耐えかねて縦に裂けてしまいました。無残な姿に変わり果てたキンモクセイを見事に蘇らせたのが、当時の附属学校部職員だった石川克己氏です。同氏は若いキンモクセイを接木することで、傷ついた老木を生き返らせました。近づいて根方を見ると、手術の跡がよくわかります。若い木を古い木の組織が包み込んで一本の木に癒着しています。当時はまだ樹木医という言葉はありませんでしたが、石川氏というすぐれた知識と技能の持ち主によって、大学のシンボルとも云えるキンモクセイが救われたことをここに書いておきたいと思います。



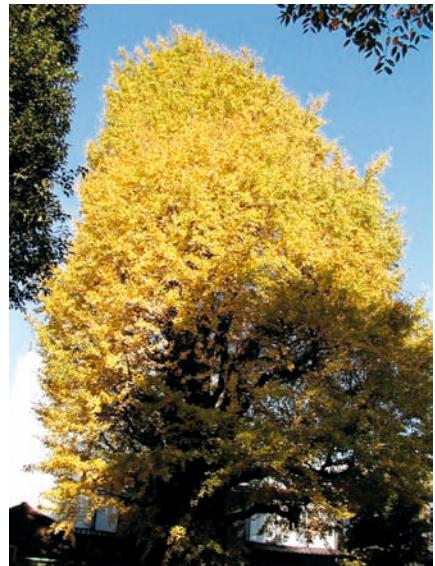
# 大イチョウ

お茶の水女子大学名誉教授 清水 碩

柵をめぐらせて厳しく守られた附属幼稚園の大イチョウを8年ぶりに訪ねました。前回は盛夏で、葉をびっしりと付けてあたりは薄暗く、近寄り難い雰囲気を感じさせましたが、秋が深まりすっかり黄色に色付いた今回は、明るく愛想のよい好々爺を思わせます。根元に置かれたよく使い込まれた遊具も、園児との関係をしのばせてほほえましい。

雌雄二本が揃っていたのが、落雷によって雌木が失われ、揃っていれば天然記念物に指定されていたと惜しむ声を聞いた記憶があります。

幹の直径から樹齢はおよそ300年と推測されます。巨木といわれるものにイチョウが多いのですが、その理由は不明です。樹齢1000年以上の屋久杉の例もあることから、植物にはもともと寿命はないのかも知れません。動物のように動くことのできない植物は、種子の落ちた場所で一生を終えるように定められ、自分の望む場所や条件で生きることを望めません。そして花を付けたり、実を結ぶことを人間に強いられ、さらに戦火までも加わって、短く生を終えていると言えます。そうした束縛を離れ、孤高に生き続けた大イチョウに畏敬と感動を覚えるのも当然かと思います。



# 椿

佐竹 元吉（生活環境研究センター教授）  
李 宜融（生活環境研究センター講師）

キャンパスに咲いている椿が、満開の時期を迎え、爽やかな香を漂わせ美しい花を見せててくれています。日本を代表とする椿の学名は*Camellia japonica*といい、その名前のごとく、日本原産の植物です。また、「椿」という文字の通り、「春の木」です。

椿が花木として鑑賞されるようになったのは、鎌倉時代からです。公卿、僧侶、武士の間に茶道、華道が流行し、多くの大名や寺院が、きれいな品種を育種し、椿が愛用されるようになったようです。元禄時代にカメリアという宣教師が椿の実を持ち帰り、19世紀にはヨーロッパで一大ブームとなり、デュマ・フィスは「椿姫」を書きベルディがオペラに仕立てました。この美しさにヨーロッパの園芸家は日本に飛びつき、多くの品種がベルギーやオランダに渡りました。

なぜ、お茶大のキャンパスに椿が多いかご存知でしょうか。本学の故津山尚教授が学問的な椿の研究を行い、国内の全品種を収集し、“日本の椿”という本を出版した際に、代表的な椿の品種をキャンパスに植えたからです。



# 「お茶大☆キラリ」 第55回徽音祭を終えて」

お茶の水女子大学徽音祭実行委員長 末澤 汐音

11月13、14日、第55回徽音祭「“ART” お茶大☆キラリ～夢のオモチャ箱～」、楽しんで頂けたでしょうか？ おとなしい、元気が無い、と言われて久しい徽音祭。でも、お茶大でもここまでやれるんだ。色んなことをしている色なお茶大生を知りたい。お互に知ってほしい。そんな意気込み、メッセージを体現すべく1年間活動してきた。中夜祭でのOCHA☆1決定戦、NFIK大賞、映像企画、アートタワー…。それぞれの企画に、「お茶大の常識を覆したい」「お客様を楽しませたい」「学内生を巻き込みたい」というそれぞれの思いがあった。結果、大成功。来場者数2日でのべ1万人。中夜祭を始め、夕方遅くまで学内に人があふ



れかえっているお茶大を見ながら、実行委員一同大満足。何より、参加者の皆様の笑顔と、横にいるスタッフ90人という仲間の存在は何ものにもかえがたい。ただ、欲を言うならば、学内生の参加団体数をみると学内生の巻き込みはまだスタートをきったばかりだ。今年徽音祭を楽しんでくれた方が来年も参加してくださり、全体の参加団体数が増えたとき初めて学内巻き込みの土台づくりとして、今年の徽音祭が本当の意味での成功になるのだと思う。来年に乞うご期待である。最後に、沢山のご協力をいただいた関係者の皆様に心より感謝し、この文章を終わらせていただきます。お茶大☆キラリ！

## 大学の暦

平成17年1月～平成17年4月

1月15・16日	大学入試センター試験
2月3・4日	大学院博士前期課程入学試験
2月25・26日	学部入学試験前期日程
3月3～5日	大学院博士後期課程入学試験
3月12日	学部入学試験後期日程
3月23日	卒業式、大学院学位記授与式
4月8日	入学式、大学院入学式



【表紙の写真】左から、タチバナモドキ、サザンカ、ギンモクセイ

【撮影場所】お茶の水女子大学構内

【写真提供】佐竹 元吉 生活環境研究センター教授

李 宜融 生活環境研究センター講師

## 編集後記

全国から集まった本学の学生たちにとって構内の豊かな緑はほっとするもののようです。今では珍しいニホンミツバチと思われる小型のミツバチの住処があつたり、保育所や幼稚園の子どもたちが木々の中をお散歩したり、小学校の学習にも緑は一役買っています。清水頼本学名誉教授はかつて広報誌に「…現在の学内環境を形成している植物の多くは、護国寺を瞬とする鳥たちの運んできた種から育ってきたものであろう。将来のキャンパスのなかに、こうした自然にまかせて草や木の繁る場所を積極的に残す智恵を持ちたいものである」と書かれています。本学の中期目標にもこの環境を保全することがあげられています。香淳皇后御下賜の楓、中国から持ち帰られた櫻の木などの本学の歴史を記録する木々とともに、自然からの贈り物も次の世代に渡していくたいと思います。

(編集長 柴坂)

## ■お茶の水女子大学広報誌

### Tea Times 12号

平成17年1月13日発行

#### ■編集発行

お茶の水女子大学 社会連携・広報推進室

本誌に関するご意見・ご要望・記事の掲載などは、お茶の水女子大学企画広報課にお寄せください。

#### ■編集委員

編集長 柴坂 寿子(社会連携・広報推進室)

編集事務 高橋苗々子(企画広報課)

#### ■問い合わせ先

お茶の水女子大学企画広報課

〒112-8610 東京都文京区大塚2-1-1

TEL 03-5978-5105 FAX 03-5978-5890

E-mail info@cc.ocha.ac.jp URL http://www.ocha.ac.jp

■Tea Timesは本学ホームページでもご覧になれます。

http://www.ocha.ac.jp/syuppan/